

道元禪師の宗教とその思想

青 龍 宗 二 一

—

只今、学部長先生から懇篤なるご紹介を頂き誠に有難うございます。「光陰矢の如し」と言われますが、在職三十六年の歳月がいつの間にか過ぎ去ったという感が致しております。私はこの間一貫して「道元禪師の研究」に専念して参りましたが、なお完成しておらず、今はその研究成果の一端の報告をもって、本日の最終講義に替えさせて頂きます。

宗門人の一員でありますから、道元禪師を研究することは当然のことではありますが、私は特に道元禪師の研究は道元禪師の立場に立って道元禪師を把握してゆくことを基本姿勢としております。この基本姿勢に立って、先きに学部長先生からもご紹介頂きましたように、「道元禪師の宗教思想」について教行証の三方面から組織体系化を試みているわけですが、この教行証の統一的研究は私自身の単なる思い付きによるものでなく、道元禪師自らの説示である「教行証一等の坐禪」に基づいていることに注意して頂きたいと思えます。道

元禪師の二、三の言説を挙げておきます。すなわち『永平広録』八巻の「小参法語」には、

吾が仏祖の坐禪は然らず、是れ乃ち仏行なり。所謂、仏家の体為は宗説行一等なり。一如なり。宗は証なり。説は教なり。行は修なり。向來共に学習を存するなり。応に知るべし。行は宗説を行じ、説は宗行を説き、宗は説行を証するなり。行もし説を行ぜず証を行ぜずんば、何ぞ仏法を行すと云わん。説もし行を説かず証を説かずんば、仏法を説くと称しがたし。証もし行を証せず説を証せずんば、争てか仏法を証すと名づけん。々々(原漢文)

と説かれ、また『正法眼蔵』「海印三昧」の巻ではその冒頭に

諸仏諸祖とあるに、かならず海印三昧なり。この三昧の游泳に、説時あり、証時あり、行時あり、……従来の透関破節、もとより諸仏諸祖の面々なりといえども、これ海印三昧の朝宗なり。

とありますよつに、道元禪師は教行証一等の坐禅（仏法）を自らの宗教の根本に据えて宗教思想を構築されていることも明らかであります。更に『正法眼蔵』『坐禅箴』の巻によりますと、

嫡嫡相承せるは、この坐禅の宗旨のみなり。この宗旨、
いまだ単伝せざるは仏祖にあらざるなり、この一法
（坐禅）あきらめざれば、萬法あきらめざるなり、萬行あ
きらめざるなり。……

とも示されていますが、この説示から、道元禪師の宗教思想が仏の坐禅三昧の開顯の教行証であることも、より一層明瞭となつて参ります。従つて私は近年の道元禪師研究に見られるように、禪師の思想的变化という論調には賛同しかねるし、それは禪師の最晩年においても、不染汚の坐禅についての上堂が再三なされている（『永平広録』七巻）からですが、今は省略致します。

二

知られるように、道元禪師は二十四歳で入宋して先ず両浙の知識を訪らい五門の家風をきき最後に天童如浄古仏の会下に投じて修道されました。そして宗門の正伝として伝えられた仏法は、

この単伝正直の仏法は最上のなかに最上なり、参見知識

のはじめより、さらに焼香礼拝念仏修懺看經をもちあす
ただし打座して身心脱落することをえよ。

諸仏如来ともに単伝して、阿耨菩提を証するに、最上無
為の妙術あり。これただほとけ仏にさづけてよこしまな
ることなきは、すなはち自受用三昧その標準なり。この
三昧に遊戯するに端坐參禅を正門とせり。（弁道話）

とも、また、「仏仏祖祖正伝仏法、唯打坐而已」（『永平広録』
第四巻）とも云われている「打坐」でありました。禪師の修
道はこの単伝正直の打坐（坐禅三昧）に規定され、打坐一道
を躰直に進行して、「一生参学の大事」を畢り、自らこれを我
国に正伝せられた。禪師における坐禅三昧は、「仏仏の要機、
祖祖の機要」すなわち仏祖の生命であり、「仏法の全道にして、
ならべていふべきものなき」仏祖正伝の正法であつたといつ
自信と信念をもたれております。

道元禪師は二十八歳で宋より帰朝せられた後、興聖寺、永
平寺とともに従來の寺院にない參禅弁道の僧堂を創設し、特に
永平寺では弁道法を撰して日々の行法の中心が坐禅にある事
を示された。更に帰朝当初の御撰述も『普勸坐禅儀』であり、
次いで『正法眼蔵』『弁道話』でありましたが、『普勸坐禅儀』
は坐禅の儀式を中心にその実践的方面を説き、『弁道話』は
坐禅の功德価値を中心にその理論的方面を明らかにされたも
ので、この両著によつて坐禅の実践と理論とが完成して立教

開宗の基礎が確立したものと言つても過言でありません。その後、直接坐禅に関する書として『正法眼蔵』『坐禅箴』、同「坐禅儀」、同「三昧王三昧」等を撰述され、また『正法眼蔵』九十五巻中直接坐禅に関する以外の書も、その示された処には諸種の行相教相もあり、決して単一ではありませんが、これ等の実践教法は悉く三昧より開説顯示せるもので、坐禅三昧を離れたものではありません。

打坐によつて一生參学の大事を了畢せられた禪師は、打坐を仏祖の生命として正伝し、これを実践宣揚せられたので、従つて、禪師の宗教中において打坐がその枢軸をなすことは言うまでもありません。禪師の宗教は打坐（或は坐禅或は三昧）中心主義の宗教であることをここで改めて再認識する必要があります。坐禅三昧を中心となす限り、それは禪師の宗教の全体と關係を持つべきものでなくてはならないと思ひます。

一般的には坐禅（或は打坐）は形式的的方法の意味を持ち、三昧は内容的認識の形而上的意味を持っています。形式あつての内容、内容あつての形式ですから、両者は不離の關係にあり、従つて坐禅は三昧を包含するものであり、三昧は坐禅を荷負つたものであります。禪師は「この三昧に遊化するに、端坐參禅を正門とせり」（弁道話）とも「自受用三昧に端坐依行」（同）とも言われますが、この言説を吟味すると自受用三昧に端坐し遊化するものが坐禅に外ありませんから、坐禅と

三昧とは相対的区分を付する必要はないし、「あきらかにしりぬ結跏趺坐これ三昧王三昧なり、これ証入なり」（三昧王三昧）と説かれるように、方法と結果とを分けなないで、直に打坐即三昧、打坐即証入となして、修証の対立的階級を認めないのみならず、この両語の使用についても區別はされておられません。

一般に坐禅三昧が多く禪定、禪那とも呼ばれ、この兩者の間に特別な相違が認められていませんが、禪師は自らの思想を表現する場合決して禪那、禪定の語を使用していない。それは禪師が意識的に使用せられなかつたのであつて、そこには大綱的に見て凡そ三つの理由があるように思われます。すなわち（一）禪定は未だ觀法的靜慮の域を脱し得ず、多分に禪弊を伴います。仏祖嫡伝の正統的坐禅は、兀坐して非思量の絶対心地に安住し、羶直に純粹意識を根拠として全体意識を構成し、人格の上に法界一相の統一態を具現して仏地に立つことにあります。（二）そのため禪定は証道の正門であり得ない。仏祖正伝の三昧は「羶然として尽界を超越して、仏祖の屋裏に大尊貴生なる」（三昧王三昧）、「直証菩提の修行」（弁道話）でありますが、「禪定をもて証道をつくすべからず」（仏道）と説かれるように、禪定をもつて菩提を直証する修行となす事は出来ません。（三）禪定は修行の一部分にして相対的価値のもの、禪定が直証菩提の修行でない事もその理由

はここにありわけですが、「禪那は諸行のひとつならくのみ」（仏道）とも、「禪那はまだ仏法の総要にあらず」（同）とも示されるように、禪那、禪定は仏法修行の一部分、例えば三学六度における二行あるいは五行に相對する一行であつて相對的価値しか持たない行法であります。正伝の三昧は仏法の全道であり總要であつて、佛法の全体を荷負う絶対的最高の價值行に外なりません。「弁道話」には、

いまこの如來一大事の正法眼藏、無上の大法を（中略）六度および三學の禪定にならつていふべきにあらず、この仏法の相伝の嫡意なること一代にかくれなしといふべきものなし。

と説かれる理由があります。部分的相對的禪定と三学六度を円融する事はおるか、教行全体を統一する全一的絶対的三昧とを同一線上においてその価値を論ずる事の不合理的なことは言うまでもありません。また部分的相對的禪定では他の行法の力を待たずして、独立的に直証菩提を成就する事は不可能でありますから、それ自体として証道を尽さないことも明らかであります。そこに禪師が禪那、禪定の語を使用しない所以を見ることが出来ると思ひます。

禪定と三昧との比較によつて、禪定が仏教の行法中における觀法的部分的相對的行法であり、証道の正門でない事を知

ると同時に、三昧が純粹意識を根拠する直証菩提の正行であり、全体的絶対的價值行である事をも知る事が出来ませんが、この三昧の全体性が教行証を統一する統一主体を意味しているし、そこに三昧中心主義の宗教の成立する根拠があります。単に抽象的に三昧が全体性のものであるという事のみでは成立しません。ここにその全体性が具体的に説明せられ、統一主体たる事が如実に証明されなければなりません。その如実の証明は三昧の証道の過程並びに結果を具体的に検討することによつて明瞭となりますが、ここでは結論的に述べておきます。

坐禪三昧の過程結果は「不思量而思量」の純粹意識を根拠として「非思量」の全体意識を構成する事であり、主客対立の泯絶を契機として主客円融へと開展する事であり、絶対無の真空を立場として絶対有の妙有を現成することであり、主客融合せる法界一相の統一態は知見以上の知見とも稱すべきで、直接経験者の三昧人のみが味得する自受用法案の世界に外なりません。法界一相の統一態の世界は如何なる様相、妙用を持つてあろうか。それは凡々地の三昧において行為的に純粹意識を根拠として三世十方円融の統一態を具現し、一切諸仏一切群類、一切諸法と相い共に能化所化となり、仏行を通じて相資相依の全体的關連の世界を現成せる行態が仏境界（弁道話）であります。そして三昧がそのまま仏境界

であるので、禪師は、「諸仏諸祖とあるにかならず海印三昧なり」（海印三昧）と説かれ、またこの三昧が一心と呼ばれ、その統一態を「一心一切法」、「一切法一心」とも表現し、その行為の一心を「即心是仏」と説かれています。禪師においては一切を荷負つて行じゆく行態の外に仏は存しないので、これを行仏と呼んでいます。坐禪三昧は正に本証の行仏に外なりません。

三昧に統一され、それに緣り起つ一切諸法はその行仏の規定を受けて正当真実の立場にたたしめてるので、「弁道話」には、

いまをしふる功夫弁道は、証上に萬法をあらしめ、出路に一如を行するなり。

と示されています。すなわちこれは行仏である能統一の三昧が一切萬法を証上に規定して本証の存在たらしめると同時に、一切萬法と一如に同修同証して向上発展の一路を辿っている事を示すものであります。三昧と同修同証する一切萬法はそれ自ら仏行すなわち本証の妙修を行する存在に外なりませんから、一切の存在は能統一の三昧によって本証の存在として本証の妙修を修証する本証の行仏たり得ているわけであります。

このように、一切の存在は三昧に規定され価値づけられてその真実の立場が与えられているので、三昧は一切存在並び

に一切行為の価値的根拠と言つてよいので、三昧の統一態は三昧人と一切存在と渾然一如の姿において仏、仏を説き、仏を行じ、仏を証する純粹行の世界そのものであります。この自内証の法門の表現が禪師の思想をなすもので、禪師の宗教思想とはこの三昧行自現の教行証であると言つても過言でありません。

三

先きの「海印三昧」の言説のように、三昧中に教行証の三法が包蔵されているわけですが、その三昧中に包蔵されている法門が開演されて教（存在觀）、行（修証觀）、証（仏陀觀）となります。それはすでに三昧が本証の仏でありますから、その本証の規定を受けて「本証の存在」、「本証の妙修」、「本証の行仏」として示されるので、正に本証の教行証と言つことが出来ます。道元禪師が教行証一等の坐禪を主張されている理由も理解できると思います。

本証の三昧が教行証を規定することについて、特に注目されるのは、「弁道話」の次の言葉であります。

いまをしふる功夫弁道は、証上に萬法をあらしめ、出路一如を行するなり。

と言われている説示は、誠に禪師の坐禪の体験に基づく事實を語られたものと見てよいかと思います。「証上に萬法をあ

らしめ」とは、坐禅の当処に一切の存在を本証上に立たしていることを示したものであり、同様のことを「弁道話」に「三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさととりとなる」と言われているのも、同一の趣旨であります。この点から坐禅三昧はそれ自ら一切の存在を本証に規定する妙用をもっていることが知られるわけですが、ここに本証三昧に規定された諸法 一切存在が、その真実の在り姿として示されるのが「本証の存在」思想であると言つことが出来ます。

「出路に一如を行するなり」の出路の意味については種々の解釈がありますが、今は「日々真実に生きゆく生活」と見てよいと思います。「一如を行する」とは、同じく「弁道話」に「彼々ともに一等の同修なり同証なり」とある言葉と同意で、坐禅人が一切存在と融合して一如になり、法界一相の全一的立場に立つて修証しゆく姿を言っているわけです。

これらの言葉を総合すれば、坐禅人は単に一切の存在を証上に立たしめるだけでなく、更に日々真実に生きゆく生活の上において、一切存在と一如に仏向上の道を辿りゆく価値行であると言えるわけであります。その価値行は「現成公案」の「自己の身心および他己の身心をして脱落せしむる」という自利即利他の妙行であります。この主客一如、自利即利他不二の妙行がそのまま修証不二の不染汚行であつて、それは

本証三昧に規定されることにおいてのみ可能であると、言うことに注意を要する点であります。ともあれ、本証三昧に価値づけられた妙修が修証の真実の姿として示されて「本証の妙修」の思想が説かれることとなります。

今は道元禪師の仏典観は省略します。本証の存在観について考えてみます。存在観は広く見れば法界観となり、狭く見れば衆生観となりますが、法界も衆生 禪師は有情も非情もともに衆生と規定する も存在以外のものでありませんから、存在の在り姿が明らかになればよいわけです。

一乗仏教においても、諸法はそのまま実相であり、法界は縁起であると説かれている事はよく知られておりますが、道元禪師もまた『正法眼蔵』中に「諸法実相」の巻や「三界唯心」の巻が説示されておりますことを見ても、実相思想や縁起思想が提唱されていることは明らかですが、しかし同じ諸法を仏の存在（本証の存在）として規定するにしても、「諸法は実相なり」という実相論的表現と、「一心一切法」という縁起論的表現とは、両者の間に多少の趣きが異なつてきますが、それは見方の相違によるものですから、一切存在が本証の存在であることを説くことに変わりはありません。

特に注意すべきことは、道元禪師の存在観（存在の在り姿）は本証三昧の存在の仕方、更に言いますと、三昧に統一されている諸法（一切存在）の真実の姿を直観して言語表現され

ておりますが、本証三昧中における全体的関連の統一世界に
対する見方の相違によって実相思想と縁起思想とに分れてき
ます。すなわち本証の立場から平面的に一切存在を眺める時、
一切存在はそのまま本証の姿に外ならないので、そこに「実
相思想」が把握されるわけです。更に立体的に本証人の一心
と一切存在との関係、あるいは一切存在の二々の相互関係を
見る時、そこにはすべての存在は重々無尽の相依相関の關係
にあり、全体的関連の仏世界が現成していることが知られま
すので、この点より「仏界縁起」の思想があるわけでありま
す。

以上のことは「弁道話」の巻に見られる「三業に仏印を標
し、三昧に端坐するとき」以下の説示を参究すれば、自ら理
解されることであります。

一切存在が本証の存在たり得るには、そこに一つの根拠を
絶対条件とします。本証の存在は凡人の見ている差別的実体
視觀念に基づき一切法をそのまま本証の存在とするのではな
く、一元的に融合統一されて全体的関連の世界を構成してい
る一切法を本証の存在とするものであります。従って二元的
固定的に見られている一切法をそのまま実相として肯定する
ことは大なる誤りである点に注意を要します。この誤りを破
するのが大乘仏教の般若思想ですが、道元禪師においても、
この真空の般若思想が説かれていることは言つまでもありま

せん。

「本証の存在」思想は、本証三昧の内面的な在り姿の表現
でありませんが、同様に、真空思想も本証三昧の在り姿の開示
に外なりません。その内面の在り姿とは、全体的関連の世界
を構成する根拠となります所の主客混絶の純粹意識の心地を
指しています。これは只管打坐の当体として実践的に現成せ
しめている生命的真空であります。これは一面には「存在」
に對して二元視し固定視する觀念を實踐的に破り、他面には
一切存在を統一し全体的関連の世界を實踐的に構成します根
拠となつてゐるわけです。妙有思想である実相、縁起思想を
説く限り、妙有思想と不離の關係にある真空思想が説かれる
のは自然のことです。

四

次に「本証の妙修」の思想は、本証の存在の修証を説くこ
とですから、本証の存在に基礎をおいた修証であります。が、
本証妙修の語意から見れば、本証の存在としての仏が仏の行
を行じてゆくことの意味です。しかし實際は解つたようで解
りにくい言葉であると思われまふ。注目すべきは『普勸坐禪
儀』の言葉で、そこでは大体二様の意味に示されています。
すなわち、

矧彼祇園之爲「生知」今、端坐六年之蹤跡可「見」、少林之傳「心印」今、面壁九歳之聲名尚聞、古聖既然、今人盍辨。

と語られていますのは、釈尊も達磨もともに証上の修に受用されていることを示されると同時に、今人の我々に対しても本証妙修の認識を要求したものと考えられます。今、引文中の前句である、「祇園の生知たる端坐六年の蹤跡見つべし」の句は本証の存在としての衆生が本具の仏性を発動せしめて修証することを示され、後句の「少林の心印を伝つる面壁九歳の声名尚聞ゆ」の句は、悟れる者が悟後の修証として更に修証してゆくことを語られています。前句は修証の発生を本証によつて基礎づけられ、後句は悟れる者が更に無限の修証を持続してゆくことを示されています。両句を総合して見ますと、本証の妙修とは、次のように規定できます。

本証の存在である衆生が本具の仏性を発動せしめて無限に不染汚の仏行を持続して發展向上の道を辿りゆく事を意味していると言つてよいと思ひます。従つてこの修証は「凡夫より仏へ」の行ではなく、「仏より仏へ」の行といふことになります。道元禪師はこの本証妙修について、『正法眼蔵』「弁道話」の巻第七問答に、

それ修証はひとつにあらざるとおもへる、すなはち外道の見なり。仏法には、修証これ一等なり。いまも証上の修なるゆゑに、初心の弁道すなはち本証の全体なり、かる

がゆゑに、修行の用心をさづくるにも、修のほか証をまつおもひなかれとをしふ。直指の本証なるがゆゑなるべし。すでに修の証なれば、証にはなく、証の修なれば、修にはじめなし。ここをもて、釋迦如来、迦葉尊者、ともに証上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖、おなじく証上の修に引転せらる。仏法住持のあと、みなかくのごとし。

と語られています。この文中で知られる事は、本証妙修の仏行には「証上の修」「修証不二」「修証無窮」の三義のある事であります。この証上の修は「証上の修なるがゆゑに」と言われまますように、本証妙修の基礎となすもので、この基礎の上に修証不二、修証無窮の仏行が展開してゆく事に注意すべき点であります。禪師は更にこの本証妙修の内面的作用を語つて、同巻には、

しるべし、修をはなれぬ証を染汚せざらしめんがために、仏祖しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ。妙修を放下すれば本証手の中にみてり、本証を出身すれば妙修通身におこなはる。

と示されていますが、修証不二の内面的作用に妙修本証、本証妙修の両作用のある事が知られます。これらは「修中の証」「証中の修」を意味していますが、前者は妙修を中心に本証をみた立場であつて、妙修は妙修を自現せる本証を更にその

在るべき姿へ現成してゆく自己組織を語り、後者は本証を中心に妙修をみた立場で、本証は自己展開によつて妙修を現成し、その妙修の中に自己を自現している事を示したものと思われます。

かような意味において、「証中の修」は本証自らなる法爾自然の無為無我行であります。行の一步一步が証の具体的現実態であつて、修の外に証を待つ事のない無所得無所悟の修証不染汚と言ふことが出来ます。また「修中の証」は限りなく本証を現成してゆく生命行であります。その生命行は修の刻々が証の具体的現実態であります。その現成せる証に住着する事は証の固定化であり、二元対立に墮して本証本来の立場を自ら否定する事となり、従つて修の刻々は同時に見仏と殺仏との回互円転の刻々でなければなりません。見仏の瞬間は同時に殺仏の時節であり、殺仏の瞬間は同時に見仏の時節であります。この殺仏と見仏、脱落と自己組織との連続的繰り返しの中で、本証の自己を深め、高め拡充しつつ無限に発展向上の道を辿りゆく仏の向上道であります。

この意味では、「修中の証」と「証中の修」とは同語反覆ではなく、各々その意義を異にしていますが、それが一如の姿において「仏から仏へ」の修証不二を語っています。もとよりこの修証は本証の坐禅三昧の体験を通して開かれたものであります。この坐禅三昧は「発無上心」の巻に、

諸法は有為にあらず、無為にあらず、実相なり、実相は如是実相なり、如是は而今の身心なり、この身心をもて発心すべし。

と言われますよつに、「而今の身心」に基づく坐禅三昧でありますから、「而今の身心」そのものが坐禅三昧である。従つて、この「而今の身心」(而今の生命)をもつて本証とも妙修とも言われていますから、修証不二の本証妙修は、その実「而今の身心」(生命)「そのものである」と言い得ると思ひます。かくて修証不二の本証妙修を「而今の身心」(生命)の立場から見れば、仏の仏たる所以を完うし、本来の自己の自己たる所以を発揮してゆく「而今の生命」活動、「今・此」の具体的統一活動と言つても過言でないと思ひます。

五

時間が超過しましたので、簡略に触れて行きます。

「本証の仏陀」思想は、本証の存在が本証妙修する当体を仏陀観の立場から見た思想であります。これを言い換えますと、「本証の行仏」思想に外なりません。道元禪師は「本証の行仏」という言葉を使用していませんが、「行仏威儀」の巻で知られますよつに「行仏」の語は禪師独自の思想を示す言葉として使用されており、この語の思想的源流は道元禪師の大悟の機縁であり、彼の「参禅者身心脱落也」とい

如淨の話頭に基づいていることは明らかであります。この大悟の話頭は坐禅それ自体の当体がそのまま悟の姿であることとを体得された言葉でありますから、他の言葉をもつてすれば、修証不二、坐仏など同一の思想に外なりません。この修証不二、坐仏の思想はそのまま「行仏」思想と同一思想でありますから、行仏思想が本証妙修と同一の思想と見られるわけです。

さて、行仏とは「行の仏」または「行即仏」の意味で、行ずることがそのまま仏であります。そのため道元禪師は行なき仏、抽象的仏陀や無修証の自然主義的本覚思想を徹底否定されているわけであります。そして行の伴った仏、行仏が肯定されているわけです。それは本証妙修の純粹行（不染汚行）をそのまま仏というのであります。仏という特殊な存在があつて行ずるのではなく、行ずることが仏なのであります。そのため禪師は「不染汚の修証これ仏祖なり」（自証三昧）とも「不染汚の行人をほとけといふなり」（隨聞記）とも説かれておりますことに注目すべきだと考えます。

本証の仏陀思想が行仏思想として説かれるのは、「即心是仏」の巻で、

即心是仏とは発心、修行、菩提、涅の諸仏なり、いまだ発心修行菩提涅槃せざるは即心是仏にあらず。

という言葉の中に、諸仏は行する諸仏であることが知れます。

不染汚行の基本は坐禅三昧でありますから、先ず坐禅がそのまま行仏とされることは言うまでもありません。「坐禅蔵」の巻に「作仏をもとめざる行仏あり」と説かれるのは、作仏を求めない純粹行の坐禅をそのまま行仏であると言われるのであります。

時間の關係上、「三身未分」の仏陀觀や釈尊一仏の本尊觀については、割愛させて頂き、この講義を終わらさせて頂きます。長時間にわたつてご清聴を賜わり誠に有難うございました。

〔付記〕講義は蛇足を省き、集約改稿してあります。

平成十四年一月二十八日